



日本植物分類学会 ニュースレター

No. 24

Feb. 2007

目 次

木村陽二郎先生ご逝去のお知らせ.....	2
山崎敬先生ご逝去のお知らせ.....	2
会長あいさつ.....	2
新評議員あいさつ.....	3
編集委員長あいさつ.....	4
役員等一覧（任期：2007年1月1日～2008年12月31日）.....	4
諸報告.....	6
第6回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定.....	6
第1回日本植物分類学会論文賞の決定.....	7
2006年度第3回メール評議員会議事抄録.....	7
平成18年度日本植物分類学会講演会の報告.....	8
講演会の感想.....	8
講演会に参加して.....	9
庶務報告（2006年11月～2007年1月）.....	10
特許法第30条第1項の規定に基づく学術団体の指定について.....	10
お知らせ.....	10
日本植物分類学会第6回大会公開シンポジウムのお知らせ.....	10
評議員会開催のお知らせ.....	11
2007年度総会における審議事項.....	11
平成19（2007）年度野外研修会のお知らせ.....	16
新潟大学教育研究院自然科学系教員の公募.....	16
いきもの便り.....	18
くさいコケの話.....	18
ムシできない話・その1・.....	19
会員消息.....	20

木村陽二郎先生ご逝去のお知らせ

会長 邑田仁

本会名誉会員木村陽二郎先生は、2006年4月に93歳で逝去されました。木村先生は(旧)日本植物分類学会の前身である植物分類同志会のメンバーであり、1952年度に(旧)日本植物分類学会幹事、1957年度に庶務幹事を歴任、1977-1978年度および1979-1980年度の2期にわたり会長を務められ、1999年度に名誉会員に推挙されました。オトギリソウ科分類の専門家であり、科学史の研究者としても著名で多くの著作を発表しておられます。先生の追悼文は和文誌「分類」に掲載いたします。

木村先生のご冥福をお祈り申し上げます。

山崎敬先生ご逝去のお知らせ

会長 邑田仁

本会名誉会員山崎敬先生は2007年2月2日に86歳で逝去されました。山崎先生はゴマノハグサ科、ツツジ科などをはじめ、多くの分類群を研究され、非常に多くの論文・記事を發表されました。また、東京大学ハーバリウムに多数の標本を残されました。植物分類同志会時代からの会員であり、1951年度と1954年度に(旧)日本植物分類学会幹事、1964-1966年度に庶務幹事、1987-1988年度に会長を務められ、1999年に(旧)日本植物分類学会名誉会員に推挙されました。先生の追悼文は「分類」に掲載いたします。

山崎先生のご冥福をお祈り申し上げます。

会長あいさつ

邑田仁

新たな年を迎え、会員の皆様にはお変わりなくご活躍のことと存じます。皆様方の選挙によるご意向に従い、前期に続きもう1期会長を務めることになりました。(旧)日本植物分類学会と植物分類地理学会が統合して新しい日本植物分類学会が発足してから間もなく7年目となりますので、ここ2年間は、統合時に生じたひずみを調整しつつ会務を早く安定させるよう規約の整備や会費収入の正常化に努力する一方で、学会賞のなかに奨励賞、論文賞、大会発表賞を新設するなど、前向きな取り組みを実施してきました。これについて前期の幹事、委員、評議員の方々には献身的なご尽力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。すでに始まった今期も五百川

裕庶務幹事をはじめとする新しいメンバーで前期に負けぬよう会務を遂行しております。また、前期には多くの会員の方々に会費の完納に協力していただきまして誠にありがとうございました。海老原淳幹事に会計をお願いし、今期も引き続き会計基盤の整備に努力してまいります。

学会事業の第1の柱であるAPG発行については、岡田博編集委員長にさらにもう1期留任をお願いすることになりました。そして永益英敏委員にはAPG担当の副編集長として、日本植物分類学会にふさわしい英文誌のとりまとめをお願いすることになりました。和文誌「分類」とともに、掲載されたすべての論文が論文賞の候補となりますので、自信作を投稿していただくようお願いいたします。

同時に、会員相互の情報交換のため、小さな発見についても記事として記録発表しておくことが大切だと思います。思わぬ共同研究者が見つかるかもしれません。

3月15～17日に新潟大学で開催される大会は高橋正道大会準備委員長のもとで着々と準備されています。プログラムにありますように、学会賞ばかりでなく奨励賞受賞者の受賞講演も行われます。まだ参加をためらっている方はぜひ足を運んでいただけるよう希望します。2008年度の大会については非公式ながら首都大学東京で牧野富太郎没後50年記念大会として実施を予定しております。ご期待ください。

ニュースレターおよびホームページについては、必要な情報をタイムリーに会員にお届けできるよう、それぞれ東隆行幹事と坪田博美幹事に推進をお願いしました。ニュースや連絡事項がありましたら担当幹事にご連絡ください。

国際植物命名規約ウーンコードの和訳は大橋広好委員長のもとで第1次訳が完成し、

2007年度中に出版の予定で推敲が進められています。本学会による和訳は国際植物分類学会でも評価されており、ウーンコードにつけられた用語集は、和訳のセントルイスコードに付された用語集から出発しているそうです。学会自身の力でつくった和訳版をぜひ活用していただきたいと思います。

絶滅危惧植物・移入植物専門委員会は、第一委員会、第二委員会ともにレッドリスト改訂版の完成を目前にしています。これに関しましては、各委員の活動に加え、全国各地の会員のご協力のたまものであり、まさに分類学会の底力を示す事業であると考えます。厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、研究の多様化に対応し、かつ近隣分野と力を合わせて研究環境の改善をアピールすべく、自然史学会連合、日本分類学会連合、植物分類学会関連学会連絡会に参画して学界の動きに敏速に対応してまいります。多事に対応するためにはひとえに会員の皆様のご協力を得ることが必要ですので、どうぞよろしくお願い致します。

新評議員あいさつ

永益 英敏

第5期目にあたる日本植物分類学会評議員を代表いたしまして、ご挨拶申し上げます。

学会統合を果たしたのがつい先日のことのように思われますが、すでに6年が過ぎようとしています。月日の経つのは本当に早いものだと感じます。

この6年の間に、3人の会長のもとで、新しい学会の骨格がつくられました。現在、日本植物分類学会は会員が900名あまり。意外と多いような気もしますが、なにしろ貧乏所帯です。それでも経済規模の割には活動内容も多く、元気な学会であると個人的には思っています。会員の皆さんの積極的な活動の賜

物でしょう。

しかし、生物多様性が時代のキーワードとなった今、日本植物分類学会に期待される社会的役割はより大きなものとなっていますから、これからも学会として多くの活動を行っていく必要があります。会員の研究成果を発表する大会や会誌の充実も大きな課題です。

今期の評議員も皆さん活発に意見を述べられる方々ばかりです。当然のことですが、学会の発展のため積極的に意見を出して行きたいと思います。会員の皆様からも、どんどんと意見をいただけますようお願い申し上げます。

編集委員長あいさつ

岡田 博

邑田会長の再選に伴って編集委員長を再度、委嘱されました岡田博です。この何年かに渡り、学会誌である英文誌 (APG), 和文誌「分類」ともに総ページ数が増え、内容が年々充実し、また英文誌は年に3号発行してまいりました。このような学会誌の発展はいつでも会員皆様の積極的な寄稿、暖かい励まし、また査読をお願いした多くの方々のご助力によって成し遂げられたものです。今後とも、益々のご助力、ご協力、そして更なる積極的なご投稿をお願いする次第です。

私たち編集委員会は学会誌の更なる充実、発展を目指して、今期はさらに編集体制をより整えていきたいと考えています。和文誌は学会が統合され新学会となったときに創刊され、そのときから専任の和文誌編集担当委員を編集委員会の中に設けていました。今回、

それに加えて英文誌にも専任の編集担当委員を設ける予定です (英文誌の投稿規程の最後にある投稿先が先の号から変わったことにお気づきですか)。これによって編集作業がより効率的に、迅速に行われるものと期待しています。このことは昨年早い時期に編集委員会で検討され、今年から実施されることに決まっていました。両誌とも気力の充実した委員が担当しますので、より充実した雑誌になっていくものと期待しています。

そのようなわけで今回の編集委員長は全体の方向性を見極め、また雑誌の編集作業の環境を整えていくことに力点を置くことによって、学会誌がより充実、発展していくようがんばりたいと思っています。今後とも暖かいご助力、ご協力、またご投稿をよろしく願います。

役員等一覧 (任期：2007年1月1日～2008年12月31日)

庶務幹事 五百川 裕

今期の役員等および委員会委員が以下のように決まりましたので報告いたします。委員の検討依頼が遅れたために、一部の委員会の委員が未決定です。これらの委員に関しては、総会で報告するとともに、次号のニュースレターに掲載いたします。

会長：邑田 仁

庶務幹事：五百川 裕

会計幹事：海老原 淳

図書幹事：鈴木 武

ニュースレター担当幹事：東 隆行

ホームページ担当幹事：坪田 博美

編集委員長：岡田 博

英文誌担当委員：永益 英敏

和文誌担当委員：秋山 忍

植物分類学関連学会連絡会・日本分類学会連合担当委員：菅原 敬

自然史学会連合担当委員：西田 治文

講演会担当委員：布施 静香

評議員：梶田 忠，黒沢 高秀，高宮 正之，田村 実，出口 博則，永益 英敏，西田 佐知子，
西田 治文，野崎 久義，藤井 伸二，村上 哲明，綿野 泰行

監事：芹沢 俊介，吉田 國二（今年度の総会まで）

編集委員：永益 英敏（英文誌担当），秋山 忍（和文誌担当），秋山 弘之，伊藤 元己，角野 康郎，
川窪 伸光，瀬戸口 浩彰，高橋 英樹，高橋 正道，高宮 正之，西田 治文，根本 智行，
野崎 久義，原田 浩，村上 哲明，綿野 泰行，BOUFFORD, David E., HAKKI, Madjit I.,
HONG, Deyuan, PAK, Jae-Hong, PENG, Ching-I, TAN, Benito C.

委員会

絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会：矢原 徹一（委員長），勝山 輝男（副委員長），
川窪 伸光，高橋 英樹，横田 昌嗣，角野 康郎，芹沢 俊介，加藤 辰己，藤井 伸二，
米倉 浩司，小川 誠，高宮 正之

絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会：柏谷 博之（委員長，地衣類まとめ役），中西 稔，
井上 正鉄，岩月 善之助（蘚類まとめ役），神田 啓史，樋口 正信，古木 達郎，
長谷川 二郎，服部 力（菌類まとめ役），吹春 俊光，細矢 剛，出川 洋介，千原 光雄，
渡邊 信（藻類まとめ役）

植物データベース専門委員会：伊藤 元己（委員長），梶田 忠，藤井 伸二，永益 英敏，
三島 美佐子，山口 富美夫，海老原 淳

国際植物命名規約邦訳委員会：大橋 広好（委員長），永益 英敏（副委員長），池谷 祐幸，
海老原 淳，岡田 元，黒沢 高秀，中井 秀樹，仲田 崇志，根本 智行，早坂 英介，
邑田 仁，米倉 浩司

編集後のひとこと

いつもニュースレター（の裏表紙）を見て，ニュースレター幹事って大変そうだなあと他人
事のように思っていたのですが，まさか自分がやることになるうとは・・・

今回は締め切りと編集ソフトとの格闘でした。でも皆さんが，お忙しい中すばらしい記事を
いっぱい書いてくれたおかげで，ご覧の通り紙面がほとんど埋まってしまいました。ありがと
うございます。

ひといきついたので雪祭りにでも行ってこようかな。それでは皆様，新潟でお会いいたしま
しょう。

By 発行人

諸報告

第6回日本植物分類学会賞（学会賞・奨励賞）受賞者の決定

学会賞選考委員会委員長 加藤 雅啓

学会賞は、推薦があった11名の候補者について学会賞選考委員会において協議した結果、下記の1名が受賞者に決定しました。奨励賞は優れた研究業績をあげた将来有望な研究者（学生を含む）を顕彰するために、平成19（2007）年度から授賞することになった賞です。奨励賞候補者として8名が推薦されました。協議した結果、下記の3名の方が受賞者に決定しました。両賞についての授賞理由は以下の通りです。

学会賞

矢原 徹一 氏（九州大学理学研究院教授）

奨励賞

坪田 博美 氏（広島大学宮島自然植物実験所助教授）

藤井 紀行 氏（首都大学東京牧野標本館助手）

米倉 浩司 氏（東北大学植物園助手）

矢原徹一氏は、花と生殖に重きを置いた種分類学の分野でめざましい業績をあげてこられました。80篇を超える原著論文の他、数十に及ぶ邦文の専門書、啓蒙書、解説などを発表され、専門家ばかりでなく一般市民に対しても非常に大きな影響を与え続けてこられました。現在は進化生態学の第一線で活躍しておられます。さらに、日本植物分類学会の発展に尽くされた功績も計り知れないものがあります。学会の要職を歴任されましたが、中でも長年、絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会委員長として重責を担い、この問題に対する学会の活動と知名度を高めるのに貢献されました。

坪田博美氏は、セン類ハイゴケ類をはじめとするコケ植物の分子系統学的研究によりめざましい業績をあげ、その成果を取り込んでコケ植物の新分類体系を構築されました。日本でコケ植物の分子系統解析を定着させ、コケ植物分類学を前進させた貢献は著しいと評価されました。

藤井紀行氏は、葉緑体DNAの集団変異を解析して、分子系統地理学の分野の先駆的な研究を日本人研究者としてしかも若手研究者として行い、ヨツバシオガマなど日本産高山植物の生物地理などの解明に貢献されました。萌芽的研究を進展させた業績は奨励賞受賞にふさわしいと評価されました。

米倉浩司氏は、分類学の幅広い知識に基づき、分類が困難なタデ科、ヤナギ科などを再検討し優れた成果を上げられました。植物学名データベース BG Plants において日本産の野生植物などの和名と学名の対照、学名の出典をまとめて、汎用性の高い情報を提供して分類学の進展に著しく貢献されました。

おわりに、今回をもって2005-6年度選考委員会は解散しました。高橋英樹、村上哲明、西田佐知子、永益英敏、出口博則氏の各選考委員のご協力に深謝します。

第1回日本植物分類学会論文賞の決定

論文賞選考委員会委員長 岡田 博

当委員会は平成18年度に発行された英文誌「APG」57巻1, 2号と和文誌「分類」6巻1, 2号に収録された論文をもとに論文賞を選考しました。選考手順として以下のように行いました。まず、編集委員会の全委員（海外の委員も含め23名）に適当と思われる論文を選考委員会宛に推薦していただくように依頼し、送られてきた推薦をもとに選考委員会で選考しました。

その結果、平成18年度の最も優秀な論文として以下のように決定しました。なお、APG57巻3号に収録された論文は発行がやや遅れたこともあり、選考の対象にできませんでした。不手際をお詫びします。

受賞者：加藤 雅啓 氏（国立科学博物館）

受賞論文：APG 57巻1号：1－54ページ

Kato, M.: Taxonomic studies of Podostemaceae of Thailand. 2. Subfamily Tristichoideae and subfamily Podostemoideae with ribbon-like roots.

受賞理由：タイ国産のカワゴケソウ科植物についての優れたモノグラフで、すべての種について精緻な図がつけられ、記載内容も的確であり、多くの新分類群の記載が含まれている。アジアの植物分類学に大きな影響を与えると予想される。APGに掲載されたことによって、APGの価値を高めることにも大きく貢献した。なお、受賞の選考には直接関係ないが、本論文に関連してタイ国産のカワゴケソウ科植物の新属の記載、本論文の第1部もAPGに発表されている（Kato, Koi & Kita, APG 55(2): 65-73, 2004; Kato, APG 55(3): 133-165, 2004.）。

2006年度第3回メール評議員会議事抄録

前庶務幹事 黒沢 高秀

2006年12月20日～2007年1月10日に2006年度第3回メール評議員会が開催されましたので、議事抄録を報告します。この会議は会計決算案と予算案、事業報告案と事業計画案を評議員の方々に審議して頂き、総会までの会務・会計執行の指針を得るためのものです。なお、本ニュースレターでお知らせする、3月14日の評議員会と16日の総会に提案される議案には、その後の推移を考慮した最低限の修正が加えられている箇所がありますが、どうぞご了承下さい。

開催日時：2006年12月20日～2007年1月10日12:00

開催方法：電子メール等の媒体を用いた会議

参加者：評議員全員

議長選出

議長として邑田仁氏が選出された。

審議事項

第1号議案 2006年度決算案

第2号議案 2007年度予算案

第3号議案 2006年度事業報告案・2007年度事業計画案

審議結果

第1～3号議案は承認11、非承認0、白票2で、承認された。

議長を邑田仁氏とすることに反対はなかった。

議事録署名人として秋山弘之氏と西田佐知子氏が選出された。

平成18年度日本植物分類学会講演会の報告

田村 実 (大阪市立大学大学院理学研究科)

平成18年度日本植物分類学会講演会は、平成18年12月9日(土)に、大阪学院大学の林一彦さんに会場をお世話頂いて、大阪学院大学2号館で開催された。これは、現在の日本植物分類学会が設立されてから6回目の講演会であった。今回は、原始的な被子植物に関する話題を3つ、中国やロシアの植物に関する話題を2つ、御提供頂いた。今回の演者と話題は次の通りであった。

志賀 隆 (大阪市立自然史博物館)：日本のコウホネ属 (スイレン科) は分類できるのか？

池田 博 (岡山理科大学総合情報学部)：ヒマラヤの花一極限の世界に生きる植物たち— (スライド講演)

寺田 和雄 (福井県立恐竜博物館)：最古の被子植物 *Archaeofructus* 2種に見つかった生態的戦略— 復元模型の製作をとおして—

戸部 博 (京都大学大学院理学研究科)：被子植物の最初の胚嚢は4核、8核、あるいは9核？

河原 孝行 (森林総合研究所北海道支所)：シベリア・サハリンの植物— バイカル、ウラジオストック、サハリンの調査から— (スライド講演)



とても熱心に講演を聴いておられた方々のお姿が印象に残っている。興味深いお話をして下さった5人の演者の方々、並びにすばらしい会場を御提供下さった大阪学院大学の林一彦さんに感謝致します。

講演会の感想

山下 純 (岡山大学資源生物科学研究所)

年末のお忙しい中、5名の先生方に貴重なお話をご披露いただきました。

志賀先生には分類の困難なコウホネ属について、交雑に着目した最新の知見をうかがいました。コウホネ属の分布図を眺めていると、それぞれの種が辿ってきた歴史へと想像が膨

らみました。

戸部先生のご講演は、被子植物で *Amborella* が最初に分岐する分子系統仮説から、胚嚢の細胞数の進化がどのように解釈できるか、*Amborella* の最新データをご披露いただき、大変得な気分でした。寺田先生のご

講演にあった最古の花, *Archaeofructus* の胚嚢は、いったい何細胞何核だったのでしょうか。

日本と植物地理的に関わり深い地域の調査の様を二人の方にご紹介いただきました。

ヒマラヤの東、横断山脈とその周辺は、5 - 6000m 級の未踏峰が重畳と連なる秘境で、池田先生のスライド講演を大変羨ましく見ました。日本と同属の植物が多いのですが、日本の種との系統的關係、また全体としてどのような植生を作り上げているのか、植生帯区分や調査地域ごとの違いなど興味は尽きませんでした。

数年前に行った中国黒竜江省の針広混交林は二次林でしたが、青緑色の *Pinus koraiensis* が見はるかす地平まで亭々と聳え、林床には

日本との近縁種・共通種の植物が咲き乱れていました。「デルス・ウザーラ」の舞台となったシホテアリニ山脈の針広混交林の見事さは、中国をはるかに凌ぐと聞きますが、ウラジオストク周辺を中心に進む伐採によって失われつつあります。ロシアについての河原先生のご講演では、広葉樹二次林に咲き乱れるアツモリソウ類の多様性を拝見できました。火の不始末による山火事の高発地帯でもありますが、森で迷ったら火をつけて助けを呼べとさえ言われるそうです。

拙文では講演会の魅力をお伝えできませんが、来年は是非来てください。より多くの学生、若手研究者に参加していただき、講演会が盛り上がることを願っています。

講演会に参加して

山本 伸子 (岡山理科大学大学院)

2006年12月9日、平成18年度植物分類学会講演会に参加しました。今回初めて参加させていただきましたが、いずれも興味深いお話でした。

志賀さんは、日本のコウホネ属植物は種間で雑種を作りやすく、分類が難しいとのことをお話をされました。西日本のヒメコウホネがほとんど雑種であるということでしたが、この雑種に名前を付けたりしないのでしょうか。寺田さんと戸部先生は原始的被子植物の最新のお話をされていました。特に、最古の被子植物から見つかった生態的戦略についてのお話は、原始的な被子植物といえはセンリョウくらいしか思い浮かばない私にとって、化石からそのようなことまで分かるのかととても驚きました。いずれも普段、あまり聞くことの

出来ないお話だったので大変勉強になりました。

また、スライド講演では、ヒマラヤの植物について池田先生が、シベリア・サハリンの植物について河原さんがお話しされましたが、車が壊れたのをたたいて直したり、薪を拾ってご飯を作ったりと、とても面白そうでした。ヒマラヤのお話でも、ロシアのお話でも同じ種や近縁種が出てきて、離れているようでも関連があるのだと感じました。また、きれいな景色や植物のスライドをたくさん見せていただいて、とても面白いものでした。

ただ、少し聞きに来られた方が少ないように感じました。邑田会長が最後におっしゃったように、次回からこの興味深い講演会をもっとたくさんの方に聴いていただけたらと思います。

訂正とお詫び

ニュースレター23号の会員消息の住所変更で誤記がありました。お詫びして訂正いたします。

(正) 井藤賀 操 (誤) 井藤 賀操

(正) 高橋 奏恵 (誤) 高橋 泰恵

庶務報告 (2006年11月～2007年1月)

庶務幹事 五百川 裕 前庶務幹事 黒沢 高秀

- ・ 社団法人日本植物園協会による植物園シンポジウム「ふるさとの植物を守ろう」(2006(平成19)年3月10日)の後援依頼に対し、会長名で承諾した(12月1日)。
- ・ 国立情報学研究所長宛に、NII-ELS(国立情報学研究所電子図書館)登録雑誌の抄録情報を無料一般公開することを認める「回答票」を会長名で送付した(12月28日)。これにより、Ci-NII(国立情報学研究所論文情報ナビゲータ)で『APG』および『分類』の抄録情報の無料閲覧が可能になるとともに、Google Scholar(学術情報に対象が絞られた検索サービス)等で抄録情報による論文検索が可能になる予定です。NII-ELSやCi-NIIの詳細に関しては、国立情報学研究所のHP(<http://www.nii.ac.jp/services/service-j.shtml>)をご覧ください。

特許法第30条第1項の規定に基づく学術団体の指定について

庶務幹事 五百川 裕 前庶務幹事 黒沢 高秀

2007(平成19)年1月19日付けで日本植物分類学会が特許法第30条第1項(実用新案法第11条第1項において準用する場合も含む。)の規定に基づく学術団体に指定されました(2007011特許004)。

特許法に基づく特許となるのに必要な条件の1つに新規性要件があります。発明の内容が特許出願の前に公表された場合、その特許出願は新規性がないため、特許を得ることができません。例外として、「新規性の喪失等に対する例外救済措置」の適用を受けることができることが定められていますが、これには、以下の条件をすべて満たすことが必要です。

1. 特許庁長官が指定する学術団体が開催する研究集会において文書を以って発表した内容であること。
2. 発表から6ヶ月以内に特許法第30条の適

用を受ける旨を記載した書面を特許出願と同時に提出すること。

3. 出願の日から30日以内に、学術団体が証明する書面を提出すること。

特許出願の内容を、出願前に本学会の大会、シンポジウム、講演会等の研究集会において、原稿、図面等の文書で発表した際は、新規性の喪失等に対する例外救済措置の適用を受けるために、早めに証明書の発行依頼を庶務幹事まで任意の書式の書面でお送り下さい。なお、このような例外規定のない外国・機関へは適用されません。詳細は特許庁のHP(<http://www.jpo.go.jp/torikumi/30jyou/30jyou2/hakuran1228.htm>)をご覧ください。

なお、学会統合前に植物分類地理学会は学術団体に指定されていました。今回は、統合に伴って新規に申請が必要との特許庁の意向により再申請し、認められたものです。

お知らせ**日本植物分類学会第6回大会公開シンポジウムのお知らせ**

日本植物分類学会第6回大会準備委員会

公開シンポジウムを以下のように開催いたします。参加費は無料です。皆様ふるってご参加ください。

【日時】 2007年3月17日(土) 午後1時30分～4時00分

【会場】 新潟大学医学部有壬会館

【テーマ】 新生代の地球環境変遷と地域フロラの分化プロセス

【世話人】 高橋 正道, 西田 治文

【プログラム】

齊藤 毅 (名城大・理工)

「日本の新第三紀花粉化石群集と地球環境変遷」

百原 新 (千葉大・園芸)

「第三紀末から第四紀の日本列島の島嶼化と日本固有植物の分化プロセス」

Eun Jeong*, Kyungsik Kim (Chonbuk National Univ.) and Mitsuo Suzuki (Tohoku Univ.)

「The homogeneity and differentiation of Miocene fossil wood flora in Korea and Japan」

寺田 和雄 (福井県恐竜博)

「南米パタゴニアの第三紀植物化石からみた気候と植生の変遷」

西田 治文 (中央大・理工)

「チリ南部パタゴニアにおける暁新世鉍化植物化石群の発見とその意義」

総合討論

評議員会開催のお知らせ

庶務幹事 五百川 裕

日本植物分類学会第6回大会（於：新潟大学医学部有壬記念館）の開催に合わせ、下記の通り評議員会を開催します。評議員、幹事会等の関係各位の出席をお願いいたします。

日時： 2007年3月14日（水）16時～19時

会場： ホテルイタリア軒（新潟市西堀7番町1574, tel. 025-224-5111）

詳細は関係各位において連絡いたしますが、今回の評議委員会においては、総会における審議事項と同様の内容が審議される他、名誉会員の選出について、学生会員の資格について、大会発表者の資格についての審議が予定されております。審議事項についてご意見、ご希望がございましたら、評議員、会長、幹事、委員長のいずれかにお伝えください。

2007年度総会における審議事項

庶務幹事 五百川 裕

3月16日に開催される総会において、以下の議案が審議されます。会員各位の参加をお願いいたします。

- (1) 2006年度事業報告（案）（11-12ページ参照）
- (2) 2006年度決算報告（案）（13ページ参照）
- (3) 2007年度事業計画（案）（14ページ参照）
- (4) 2007年度予算（案）（15ページ参照）
- (5) その他

2006年度事業報告（案）

(1) 集会等の開催

- ・2006年度講演会を大阪学院大学で開催した（2006年12月9日）（8ページ参照）。
- ・年次学術集会（日本植物分類学会第5回大会）を琉球大学で開催した（3月18-20日）（ニュースレター No. 21 で報告）。
- ・2006年度野外研修会を鹿児島県種子島で開催した（11月18-19日）（ニュースレター No. 25 で報告予定）。
- ・評議員会を2回、メール評議員会を3回開催し、定例の議題の他に、2件の要望書について審議を行った（ニュースレター No. 21 で報告）。

(2) 出版物の刊行

- 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第57巻1-3号(計3冊)を発行した。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第6巻1-2号(計2冊)を発行した。
- ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』20-23号(計4冊)を発行した。

(3) 委員会活動

- 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- 植物データベース専門委員会
- 学会賞選考委員会(6ページ参照)
- 大会発表賞選考委員会
- 論文賞選考委員会(11月に発足, 7ページ参照)
- 国際植物命名規約邦訳委員会(8月に発足, ニュースレター No. 22 で報告)

(4) 表彰

- 日本植物分類学会奨励賞, 論文賞, 大会発表賞を新設した(ニュースレター No. 21 で報告)。
- 第5回(2006年度)日本植物分類学会賞の授与をおこなった(ニュースレター No. 21 で報告)。
- 日本植物分類学会第5回大会発表賞の授与をおこなった(ニュースレター No. 21 で報告)。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- 学会連合等への参加・連携をおこなった: 日本学術会議, 植物分類学関連学会連絡会, 自然史学会連合, 日本分類学会連合。
- 以下のシンポジウムの開催に協力した。日本分類学会連合主催シンポジウム「ミドリムシは動物?それとも植物?: 原生生物の不思議な世界」(2006年1月7日, 国立科学博物館分館講堂), 同共催シンポジウム「日独学術交流史-相模湾動物相調査の歴史と成果」(2006年1月8日, 国立科学博物館分館講堂), 植物分類学関連学会連絡会共催シンポジウム「配偶体の多様性と進化」(2006年9月14日, 熊本大学), 自然史学会連合講演会「教科書で学べない自然史」(2006年11月12日, 神奈川県立生命の星・地球博物館)。

(6) その他

- 学会刊行物のバックナンバー等を販売した。
- 植物分類学関連情報(学術集会, 研究動向, 出版物, 公募)を収集し, ニュースレター, ホームページ等で提供した。
- 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換を行った。
- 植物分類学マニュアルの編集(継続)。
- 未納会費の回収に取り組んだ。
- 会長および評議員選挙を行った(9月30日投票締切, 10月9日開票)(ニュースレター No. 23 で報告)。

2006 年度決算報告 (案) (2006. 1. 4 現在)

収入の部	単価	数	2006 年度予算	2006 年度決算	予算との差異
会費					
一般会員	5000	800	4000000	4329690	△ 329690 注 1
学生会員	3000	90	270000	248000	22000
団体会員	8000	30	240000	256000	△ 16000
別刷り (APG)				158500	△ 158500 注 2
バックナンバー販売			100000	162408	△ 62408
利息			20	226	△ 206
雑収入			50000	91819	△ 41819 注 3
小計			4660020	5246643	△ 586623
繰越金			6877238	6877238	0
合計			11537258	12123881	△ 586623

支出の部	単価	数	2006 年度予算	2006 年度決算	予算との差異
大会補助費			100000	100000	0
講演会補助費			30000	0	30000 注 4
出版物印刷費					
APG (57 (1) -57 (3)) 印刷費	700000	3	2100000	1429847	670153 注 5
APG カラー印刷費	20000	3	60000	0	60000 注 6
和文誌印刷費 (6 (1), 6 (2))	500000	2	1000000	1119027	△ 119027
NL20, 21, 22, 23 印刷費	80000	4	320000	238348	81652 注 7
英文校閲費			120000	119129	871
出版物送料					
APG 57 (1) 送料	110	3000	330000	133120	196880
和文誌 6 (1) (2) 送料	145	2000	290000	242630	47370 注 8
NL21, 22, 23 送料	110	2000	220000	240670	△ 20670
会議費			330000	34542	295458 注 9
学会賞賛金・表彰経費	30000	2	60000	60000	0
自然史学会連合負担金			20000	20000	0
分類学会連合負担金			10000	10000	0
事務費					
消耗品費			50000	40838	9162
アルバイト賃金 (発送代料を含む)			180000	163965	16035
封筒等印刷費			300000	36750	263250 注 10
通信費 (小包手数料を含む)			250000	80865	169135 注 11
手数料・その他			20000	12230	7770
自動振替集金代行基本料			3150	6300	△ 3150 注 12
自動振替口座確認手数料			11100	25893	△ 14793 注 13
予備費			200000	25990	174010 注 14
小計			6004250	4140144	1864106
次年度への繰越			5533008	7983737	△ 2450729
合計			11537258	12123881	△ 586623

注 1: 滞納会費の納入が多かったため。誤引落金 (注 14) の 50000 円を含む。

注 2: 2005 年度以前請求の別刷り代金

注 3: 著作権使用料 4.5 万円、絵はがき販売 1.5 万円など

注 4: 12 月 9 日に開催されたが補助金は利用されなかった

注 5: 57 (1, 2) のみ執行。57 (3) は 2007 年度に印刷。

注 6: 印刷業者が著者に直接請求するようになったため

注 7: P D F 入稿が可能な印刷業者になり、印刷代が下がった。

注 8: NL (1) は和文誌 6 (1) と、APG57 (2) は分類 6 (2) と同時発送。

注 9: 20 万円を計上した国際植物命名規約邦訳出版会議は未開催

注 10: 封筒の印刷が無かったため。今後は事務局移転年度は予算 30 万円、それ以外は 5 万円とする。

注 11: 幹事交代に関わる費用が無かったために、2005 年度よりも減額となった。

注 12: セントラルファイナンスの登録ミスにより、2005、2006 年度共に 2 回に分けて引落されたため 2 回分の基本料 (3,150 円 × 2) が重複して発生したが、その後返還された (雑収入に計上)。

注 13: 自動引落会員数の増加による振替手数料および新規手数料の増加。

注 14: 退会者からの誤引落金 (2005, 2006 年度分) の返却 1 万円、献花代 1.5 万円

特別会計 2006 年度決算

収入	2006 年度予算	2006 年度決算	予算との差異
前年度繰越金	2013027	2013027	0
利息	0	0	0
合計	2013027	2013027	0
支出			
次年度への繰越金	2013027	2013027	0
合計	2013027	2013027	0

2007 年度事業計画 (案)

(1) 集会等の開催

- ・ 2007 年度講演会を開催する。
- ・ 年次学術集会（日本植物分類学会第 6 回大会：新潟大学（3 月 14 ～ 17 日））を開催する。
- ・ 2007 年度野外研修会を開催する。

(2) 出版物の刊行

- ・ 学会誌の発行
英文誌『Acta Phytotaxonomica et Geobotanica』第 58 巻 1-3 号（計 3 冊）を発行する。
和文誌『分類 [日本植物分類学会誌]』第 7 巻 1-2 号（計 2 冊）を発行する。
- ・ ニュースレター『日本植物分類学会ニュースレター』24-27 号（計 4 冊）を発行する。
- ・ 国際植物命名規約（邦訳版）を発行する。

(3) 委員会活動

以下の委員会を組織し、目的に沿って活動する。

- ・ 絶滅危惧植物・移入植物専門第一委員会
- ・ 絶滅危惧植物・移入植物専門第二委員会
- ・ 植物データベース専門委員会
- ・ 学会賞選考委員会
- ・ 大会発表賞選考委員会
- ・ 論文賞選考委員会
- ・ 国際植物命名規約邦訳委員会

(4) 表彰

- ・ 第 6 回（2007 年度）日本植物分類学会賞および奨励賞の授与をおこなう。
- ・ 日本植物分類学会第 6 回大会発表賞の授与をおこなう。
- ・ 2006 年度の日本植物分類学会論文賞の授与をおこなう。

(5) 国内外の関係学術団体との連携・協力

- ・ 学会連合等への参加・連携をおこなう：日本学術会議、植物分類学関連学会連絡会、自然史学会連合、日本分類学会連合など。

(6) その他

- ・ 学会刊行物のバックナンバー等の販売を行う。
- ・ 植物分類学関連情報（学術集会、研究動向、出版物、公募）を収集し、ニュースレター、ホームページ等で提供する。
- ・ 学会刊行物の国内外の研究機関への寄贈と交換をする。
- ・ 植物分類学マニュアルの編集を継続する。

2007 年度予算 (案)

収入の部	単価	数	2007 年度予算	前年度予算との差異
会費				
一般会員	5000	800	4000000	0
学生会員	3000	75	225000	△ 45000 注 1
団体会員	8000	30	240000	0
バックナンバー販売			100000	0
利息			20	0
雑収入			50000	0
小計			4615020	△ 45000
繰越金			7983737	1106499
合計			12598757	1061499

支出の部

大会補助費			100000	0
講演会補助費			30000	0
出版物印刷費				
APG (57(3), 58(1) -58(3)) 印刷費	700000	4	2800000	△ 700000 注 2
和文誌印刷費 (7(1), 7(2))	500000	2	1000000	0
NL24, 25, 26, 27 印刷費	70000	4	280000	40000 注 3
英文校閲費			120000	0
出版物送料				
APG 送料	110	4000	440000	△ 110000 注 2
和文誌送料	145	2000	290000	0 注 4
NL 送料	110	2000	220000	0 注 4
会議費			330000	0 注 5
学会賞賞金・表彰経費	30000	2	60000	0
自然史学会連合負担金			20000	0
分類学会連合分担金			10000	0
事務費				
消耗品費			50000	0
アルバイト賃金 (発送代行料を含む)			180000	0
封筒等印刷費			300000	0 注 6
通信費 (小包手数料を含む)			200000	50000
手数料・その他			20000	0
自動振替集金代行基本料			3150	0
自動振替口座確認手数料	177	120	21240	△ 10140
予備費			200000	0
小計			6674390	△ 670140
次年度への繰越			5924367	△ 391359
合計			12598757	△ 1061499

注 1: 学生として登録されていた一般会員の登録移行作業が進んだため

注 2: APG57(3) を含む

注 3: 印刷業者が変わるため、2006 年度予算と 2006 年度実績の中間的な予算とした

注 4: 和文誌と NL2 回を同時発送する場合の送料見積もり

注 5: 国際植物命名規約邦訳出版会議 20 万円を含む

注 6: 事務局移転に伴う封筒類印刷

特別会計 2007 年度予算 (案)

収入	2007 年度予算	前年度予算との差異
前年度繰越金	2013027	0
利息	0	0
合計	2013027	0

支出

国際植物命名規約邦訳出版費	1200000	
次年度への繰越金	813027	△ 1200000
合計	2013027	0

平成 19(2007) 年度野外研修会のお知らせ

池田 博 (岡山理科大学)

—阿哲地域の植物—

期日と日程：2007 年 5 月 26 日 (土)・27 日 (日)

第 1 日目 (26 日) 岡山駅または岡山空港に 13:00 までに集合し、新見市方面へ。新見市周辺で阿哲地域の植物を観察。夜に懇親会 (宿泊は新見市または高梁市の民宿を予定)。

第 2 日目 (27 日) 第 1 日目に引き続き、高梁市周辺で阿哲地域の植物を観察。15:00 頃まで観察会を行ない、解散。電車または飛行機で来られた方は、岡山駅または岡山空港までお送りします。

=====
平成 19 年度の野外研修会は、岡山県西部と広島県東部にまたがる石灰岩地域 (阿哲地域) の植物を観察したいと思います。

阿哲地域は、前川文夫によって日本の植物区系のひとつとされた地域で、この地域に固有な種、または大陸系の種が多く分布しています。今回は、阿哲地域を特徴づける植物が多く観察できる場所を中心に行動し、晩春の花を楽しんでいただけたら、と考えています。

イワツクバネウツギ、チョウジガマズミ、キビナワシロイチゴ、キビノクロウメモドキ、チョウセンヒメツゲ、ナツアサドリ、ビッチュウヒカゲスゲなど、阿哲地域に特徴的な植物のほか、ハンショウヅル、アサガラ、コガクウツギ、ケテイカカズラや、バラの仲間 (ヤマイバラ、ミヤコイバラ、テリハノイバラなど) の花も見ることができると思います。

=====
参加費用 (岡山到着から岡山解散までの宿泊、食事、交通費など) : 15,000 円程度

申し込み: 〒 700-0005

岡山市理大町 1-1 岡山理科大学総合情報学部生物地球システム学科

池田 博 宛

Tel/Fax: 086-256-9640

E-mail: ikeda@big.ous.ac.jp

郵便、ファックス、またはメールでお申し込み下さい。申し込みの際には、氏名、連絡先住所、電話 (あればファックス番号も)、メールアドレスを明記していただき、4 月 20 日までにお申し込み下さい。申し込み順に 20 名で締め切らせていただく予定です。なお、前後泊をご希望の方は、申し込み時にお知らせ下さい。また、特に観察したい植物がありましたら、申し込み時にご連絡ください。可能であれば考慮いたします。

新潟大学教育研究院自然科学系教員

(所属 理学部自然環境科学科) の公募

高橋 正道 (新潟大学)

1. 所 属: 新潟大学教育研究院自然科学系 環境共生科学系列
2. 担当学部・研究科: 理学部・自然環境科学科・環境生物学大講座
大学院自然科学研究科・環境共生科学専攻・自然システム科学大講座
3. 担当予定科目: 学部; 基礎生物学, 環境生物学分野の専門科目
大学院; 多様性生物学に関係する専門科目, その他

4. 職種・人員 准教授： 1名
5. 採用予定日：平成19年6月1日以降のなるべく早い時期
6. 給 与：国立大学法人新潟大学職員給与規程による。
7. 職務内容・条件：多様性生物学分野の教育及び研究。1) 野生生物を研究対象とした独創的な研究を行う、あるいは2) 既存のスタッフと協同して野生生物を含めた特色ある研究を遂行できる。また、学部と大学院の教育に情熱をもって取り組むこと。
8. 応募資格：
 - (1) 博士の学位を有する、40歳前後あるいはそれ以下の者。
 - (2) 多様性生物学分野の十分な業績があること。
 - (3) 生物系の学士課程および大学院教育に意欲があり、教育者として十分な資質を有すること。
 - (4) カリキュラム編成に積極的に取り組むなど教育改革に意欲があること。
9. 応募書類（各1部）：
 - (1) 履歴書（写真付き）
 - (2) 著書、学術論文（学位論文、査読付きの原著論文、総説に区分）のリスト。これには、著者名、論文名、雑誌名、巻、最初と最後のページ、発表年（西暦）について記入されていること。
 - (3) 主要論文5編以内の別刷あるいはコピー
 - (4) これまでの教育研究概要と採用された場合の教育及び研究の抱負について、全体で2,000字程度にまとめたもの
 - (5) 過去5年間の外部資金獲得状況
 - (6) 担当可能な講義科目（1科目）のシラバス案（授業概要、達成目標、15回分の授業計画を含めて1000字程度でまとめたもの）
 - (7) 応募者について意見を聞くことのできる方2名の氏名と連絡先
10. 応募の締切：平成19年3月19日（月）必着
11. 選考方法：応募書類による選考を行う。最終選考で面接を行う。
12. 提出書類の送付・問合せ：
 - (1) 送付先 〒950-2181 新潟市五十嵐二の町8050番地 新潟大学自然科学系庶務係
（封筒の表に「生物科学系教員応募書類在中」と朱書きし、簡易書留で送付のこと）
（注）応募書類は選考以外の目的には使用しません。選考終了後は選考を通過した方の情報を除き、全ての個人情報責任を持って破棄し、返却いたしません。
 - (2) 問い合わせ先
新潟大学自然科学系・教授 酒泉 満（理学部自然環境科学科担当）
電話 025-262-6368（直通） E-mail: sakaizum@env.sc.niigata-u.ac.jp

※担当予定学部・研究科の活動内容については、以下のホームページを参考のこと。

新潟大学理学部 <http://www.sc.niigata-u.ac.jp/sc/>

新潟大学大学院自然科学研究科 <http://www.gs.niigata-u.ac.jp/~gsweb/index.html>

学部、大学院ともに、物理・化学・生物・地学の基礎理学を学ぶとともに、グローバルな視野のもと、種々の環境問題に対応できる科学的な自然認識と創造性あふれる人材の養成をめざした教育が実施されてきた。理学部自然環境科学科は、1994年の設立から13年を経過し、これまでの総括とその後の社会的要請と教員構成の変化を踏まえ、講座体制、カリキュラムの変更も含めた将来構想の検討が進められている。その骨子は、地球科学系と広義の生物科学系を2つの大きな柱に据え、両者を化学と物理学を媒介にゆるやかに結合しようという内容である。

いきもの便り

くさいコケの話

有川 智己 (慶應義塾大学)

採集や調査に出かけるのは楽しいですが、採集したものを標本にしたり整理したりするのは結構大変だと思います。このニュースレターをお読みの方には、植物を丁寧に折りたたんで新聞紙に挟んだり新聞紙を毎日換えたり、手間暇かけて標本を作られる方が多いことでしょう。それに対してコケ植物の標本作りはわりと楽です。着生基物から剥がした群落を、ゴミを除いたり形を整えたりして、濡れていれば水を切り、採集用紙にくるんでメモをつけます。そしてなるべく風通しのよいところに置いておけば、とりあえずは大丈夫。後日、しっかり乾いたらラベルの付いた標本袋に移せば標本のできあがり。観察するときは一部をとって水につければ形が戻って顕微鏡観察可能。比較的ものぐさな人にも向いています。できれば早いうちに採集用紙を広げて形を整え速やかに乾かしたほうがいい標本になります。

調査地では、道々コケを採って採集用紙にくるみ、それをビニール袋やトートバックなどに放り込みながら進むことになります。袋が一杯になったらザックに詰めます。ぎゅうぎゅうに押し込んでしまうとコケが蒸れたり形が悪くなったりするので加減が大事です。でも、この写真のコケはそうもいきません。

写真のコケは、オオツボゴケ科のマルダイゴケ。広く北半球の寒冷地に分布し、日本では本州や北海道の高山帯に生育します。葉は柔らかく鮮やかな黄緑色で、その上に長い黄褐色の胞子体がたくさん伸びます。胞子体頂



2002年7月17日、南アルプスの聖岳付近で。
撮影：有川 智己 (右上も同じ)



端のさくは最初黄緑色で、やがて赤黒く熟します。苦勞して高山の稜線に登らないと見られず、また見栄えもいいので、初めてみた時は私も喜々としてして写真をとり採集しました。しかし、このコケはかなり独特な匂いがします。やがて匂いで、「あ、近くにマルダイゴケ(か、その仲間)があるな」とわかるようになります。採って袋に入れてもかなり臭います。すれ違ったり追い越したりしてゆく登山者も変な顔をします。それで、ビニール袋の奥底に入れて、他のコケと一緒にしっかり詰めて口を堅く縛ってザックの底に押し込んでしまいました。

高山帯の調査では山小屋に泊まるわけですが、なるべくコケは風通しのいいところにおいて早く乾かしたいので、山小屋がよほど混んでいないかぎり、袋をザックからだして袋の口をゆるめておいたりします。しかし、マルダイゴケの入った袋の口は、ゆるめると他のお客さんに迷惑な気が。まあ、山小屋ですから多少臭いには寛容にならざるをえません。そんなわけで、私のこの時の採集品は、グシャっとしたあまりきれいでない標本になってしまいました。

このマルダイゴケやその仲間は、さくの大きく膨らんだところから匂いを出しており、この匂いを見かけでハエ等を集めます。ハエはさくの上をうろろするうちに胞子を体に付け、そして動物の糞の上へ胞子を運びます。つまり、マルダイゴケ類が生えるのは高山に住む動物の糞の上です。はたして強烈に臭っていたのは本当にコケか、それとも着生基物だったのか…。それは考えないことにしましょう。

ムシできない話・その1・

三島 美佐子 (九州大学)

私は十年くらい、倍数性やゲノムが面白くて研究を続けてきたのだけれども、ひょんなことで数年前から、植物に寄生するちっちゃなハエが作る、ムシコブというものにはまってしまった。このちっちゃなハエは、タマバエという。見た目はほとんど蚊みたいだ。春、卵から出てきたタマバエ幼虫は、植物組織に潜り込み、秋口までには植物組織を操作してシェルターを作り上げる。そのシェルターが、ムシコブとかゴールとか呼ばれているものだ。このムシコブ、タマバエの種によって、実にバラエティ豊かな形をしていて、時に巧妙な仕掛けがあったりする。もともとその植物にはありえない形や構造物なのに、すごく不思議じゃないですか！そんなこんなで私は、植物にとってはちょっと迷惑な「デキモノ」と、それを植物に作らせちゃうやつらに魅了されてしまっているのである。

とはいえ未だに慣れない難点が2つある。いくら形や色が美しかろうとも、やっぱり「デキモノ」は「デキモノ」。うじゃうじゃと大量発生しているときのムシコブは、鳥肌モノである。はっきりいってキタナイ。ほんとは、出来れば、サワリタクナイ…。もうひとつの



図1. 可哀相なくらい、たかられているシロダモ。ここまでくると、一枚の葉も、ずっしりと重い。さすがに植物もたまらないらしく、葉がもげやすくなることはもちろん、翌年のシュートがとまってしまったりするようだ。それでもこの調査木はここ数年、いつもこんな感じでたかられている。場所は、熊本県の豊野と小川の町境付近。このムシコブの主であるシロダモタマバエは、二型のムシコブを示すまれな群のひとつで、この地域はその分布境界にあたる。この個体を挟んで南北約1キロメートルが、まさに移行帯。(撮影：三島 美佐子, 2004年7月)

難点は、タマバエに寄生する、ハチ。寄生蜂には大きく2種類あって、完全にできあがったムシコブに産卵管をつきさして、3齢幼虫以降のタマバエがいる部屋の中に卵を産み付け、ふ化したハチ幼虫が、タマバエ幼虫や蛹をばりばり食べてしまう「外部寄生蜂」、もうひとつは、まだ小さくてやわらかいできたてのムシコブ内部に産卵し、ふ化したハチ幼虫はタマバエ幼虫に潜り込んで休眠、タマバエが3齢幼虫になるころめきめき成長し、薄皮だけ残して体を食らいつくす「内部寄生蜂」。ええ、ええ、彼らは研究対象としてとっても面白いし、ムシコブ進化の非常に重要な立役者ですよ。別にその存在自体はいいんです。でも、でも、この「内部寄生蜂」にやられたタマバエ幼虫、ピンセットでちょっと引っかけたくらいで、たいがい、ぶちゅっとなつづれてしまい、中から白いうにういのハチ幼虫が、ぶりゅっ♪と出てくるのだ！あゝーっっ、キモチワルウー！！！！ <(TOT)>

とまあ、昆虫プロパーでない者にとって(なのかどうかわからないが)、ツライものがある。が、それに耐えてでも続けたい面白さが、ムシコブ研究にはあるのです。では次回は、もうちょっと掘り下げて、お話ししよう。(つづく)



図2. 左上：ホソバタバの葉裏に作られるムシコブ。左下：その切断面。中央の白いのが、早い時期の蛹。右上：そのムシコブの“ハッチ”構造。中の成虫が羽化するとき、内側からぎゅうぎゅう押し上げると、写真のようにぱかっとなつちが開き、めでたく外に出られる、という仕組み。右下：タバの葉裏に作られるムシコブの切断面。中央下部に、同様な構造がある。

タマバエは一体、どうやってこんなうまい仕組みを、植物に作らせることができるのだろうか？ちなみに *Machilus* は、複数種のタマバエによって、非常に多様なムシコブがつくられることが知られている寄主植物群のひとつ。(スケールは3mm, 撮影：三島 美佐子)

会員消息

■新入会

- 白水 貴 〒 386-2204 長野県上田市菅平高原 1278-294 筑波大学菅平高原実験センター
 中川 昌人 〒 603-8047 京都市北区上賀茂本山 457-4 総合地球環境学研究所
 石川 直子 〒 444-8585 愛知県岡崎市明大寺町西郷中 38 基礎生物学研究所
 中川 さやか 〒 780-8520 高知市曙町二丁目 5-1 高知大学 理学部 自然環境科学科
 平原 友紀 〒 700-0005 岡山県岡山市理大町 1-1 岡山理科大学 総合情報学部 生物地球システム学科 星野研究室
 平尾 知士 〒 016-0876 秋田県能代市海詠坂 11-1 秋田県立大学 木材高度加工研究所
 高島 路久 〒 112-0001 東京都文京区白山 3 丁目 7 番 1 号 東京大学大学院理学系研究科 生物科学専攻
 高橋 直子 〒 112-8681 東京都文京区目白台 2-8-1 日本女子大学大学院 理学研究科 今市研究室
 広瀬 大 〒 386-2204 長野県上田市菅平高原 1278-294 筑波大学菅平高原実験センター
 佐藤 桐子 〒 780-8515 高知市永国寺町 5-15 高知女子大学大学院 人間生活学研究科

■住所変更

- 井鷲 裕司 〒 606-8502 京都市左京区北白川追分町 京都大学大学院農学研究科森林科学専攻森林生物学研究室
 黒沢 高秀 〒 960-1296 福島市金谷川 1 福島大学共生システム理工学類
 山田 敏弘 〒 920-1192 金沢市角間町 金沢大学大学院自然科学研究科 生命科学専攻 植物自然史研究室
 岩元 明敏 〒 259-1293 平塚市土屋 2946 神奈川大学理学部生物科学科

■逝去

本会名誉会員，木村陽二郎氏，山崎敬氏はお亡くなりになりました。深く哀悼の意を表します。

■退会

木下 長則，吉澤 和徳，本村 浩之，上野 裕，菅野 宗武，小路 登一，室屋 瀧雄，速水 健一，伊藤 浩司，岡本 恒美，葛山 博次，斎木 健一，横山 俊一，西 豊行，喜多 陽子，西沢 信一，鈴鹿 紀

■以下の会員の連絡先をご存じの方は，会計幹事までお知らせください

今津 道夫，笈木 秀治，加藤 辰己，桐野 秀信，串田 宏人，楠瀬 雄三，熊谷 宜子，澤田 久一郎，高山 徹，橋本 宣子，日向 真理子，細谷 治夫，榎本 祐子，松田 恭子，吉野 知明

入会申込，住所変更，退会届，会費納入，購読申込などは下記へご連絡ください。

〒 305-0005 茨城県つくば市天久保 4-1-1
 国立科学博物館 植物研究部
 日本植物分類学会 海老原 淳（会計幹事）
 Phone: 029-853-8988, Fax: 029-853-8401
 E-mail: ebihara@kahaku.go.jp
 会 費：一般会員 5,000 円，学生会員 3,000 円，
 団体会員 8,000 円
 郵便振替口座番号：00120-9-41247
 加入者名：日本植物分類学会

平成 19（2007）年 2 月 16 日印刷
 平成 19（2007）年 2 月 20 日発行

編集兼 札幌市中央区北 3 条西 8 丁目
 発行人 北海道大学植物園
 東 隆行

発行所 上越市山屋敷町 1
 上越教育大学自然系教育講座内
 日本植物分類学会